



1988年 ソウルパラリンピック(役員左端)

## 第41回

# 1964東京～2020東京へのタイムトラベル

# 井手精一郎

ite seiichiro

第4回ゲストの井手精一郎さんは、厚生省(現在の厚生労働省)職員として1964年東京パラリンピックの準備・運営に携わり、その後は日本身体障害者スポーツ協会(現在の日本障がい者スポーツ協会)の常務理事として長期にわたってさまざまな制度や組織づくりを進めた功労者。

1984年ニューヨーク大会、88年ソウル大会、92年バルセロナ大会の日本選手団団長、98年長野大会の選手村副村長を歴任した、日本パラリンピックの生けるレガシーとも言える存在だ。

戦後引揚げ者援護から始まったキャリアはいつしか井手さんを障害者スポーツ推進のエキスパートたらしめ、その熱意と行動力が現在の日本の障害者スポーツの基礎を築いた。

インタビュー時91歳の高齢を感じさせないパワーあふれる語りから、日本の障害者スポーツの黎明期から現代までの発展の歴史が生き生きとつむがれ、そして障害者のスポーツを通じた自己実現への強い思いが伝わってくる。

聞き手/山本浩 文/高橋玲美 構成/フォート・キシモト 写真/井手精一郎、フォート・キシモト

## 大正生まれ、戦中育ち、 戦後引揚げ対応で厚生省へ

——東京でお生まれになりました。干支で言う  
何年ですか？

子年です。大正13年です。米屋のせがれでござ  
います。

——ということは、戦争が激しくなりますと……。  
徴兵で一般兵営に入るのがいやなものですから、特別甲種幹部候補生の第1期生で豊橋の  
予備士官学校へ入りました。そして卒業します  
と、歩兵514連隊最後の精鋭部隊といわれると  
ころに配属になりました。

——「将来自分はこうするんだ」というような展  
望をもつ時代ではなかったのですね。  
戦争で食糧が統制になりまして、米屋は商売を  
やっていけなくなったものですから、しょうがないか  
ら大学にでも行くかというところでした。

—— 当時は、運動などはされてはいましたか？  
運動とはいえない殺伐たるものでございまして、  
当時やっていたのは射撃と銃剣道。

—— まあ時代ですからね。その後昭和21年に  
厚生省に入られます。  
知り合いの誰かが口をきいてくれたらいいん  
ですが、大学を途中でやめまして、引揚援護院とい  
うところで採用されました。月給55円で(笑) 当時は  
ヤミ屋のほうが儲かると言っただけで役所をやめてい  
く人も多かったんです。



1946年 歩兵第514連隊、解散の日(後ろから2列目左端)

—— 戦地からの引揚げ者の対応はいかがでし  
たか？

引揚げも大きな山を越えまして、残っていたのは  
シベリア抑留者くらいでした。地方援護局で残っ  
ているのは舞鶴と佐世保の2カ所でした。私は引  
揚援護院の庶務課というところで、主に予算の  
編成、執行をやらされていました。そろばんがで  
きたもんですから。昭和24年に社会局に移ったとき  
もそろばんのおかげで、生活保護費の予算に10  
年間取り組んでいました。

## 大分で 障害者関連事業に触れる

—— そして昭和37年に大分県に出て行かれる  
わけですね。

はい。そこで年金の仕事をして2年近くして、東京オリ  
ンピック開催年の4月に東京に帰ってきました。

—— 大分には中村裕先生という有名な先生が  
いらっしゃいました。

当時は国立別府病院の整形外科の医者でし  
た。彼はイギリスのストック・マンデビル病院に留  
学し、ルートヴィヒ・グットマン博士に感化されて、  
障害者スポーツを広めようという志とともに帰っ  
てきました。今、彼は日本の障害者スポーツの父と  
言われています。

—— 大分県ではその前から、障害者スポーツの  
動きはあったわけですか？

はい。別府に重度障害者の保養所があったん  
です。重度ですから社会復帰するのではなくて、お  
大事に療養しなさいという施設だったわけです。



中村裕博士



1949年 厚生省 社会局 保険課一同(伊豆)(後列右から5人目)



—— 大分県の県庁に障害者を担当する部署があったそうですね。

はい。社会課というのですが、そこは親しくしてました。たとえば施設をつくりたいとなれば、厚生省から補助金が出るかといったことを打診した上で、県で予算をつくる。そういう意味では、私も障害者関連についてまったく門外漢<sup>もんがいかん</sup>なことではありませんでした。ただ、障害者スポーツは知りませんでした。県の担当部署ではかなり専門的なこともやっていたと思いますが、一般的には障害者がスポーツをするという考えはない。昭和24年に「身体障害者福祉法」ができて、各県に1か所ずつ「身体障害者センター」をつくってリハビリテーションをやりなさいということになっていたわけですが、実際はあまり積極的に行われていなかった。東京都あたりは昭和25、6年くらいから運動療法みたいなのはやっていたようですが、非常に部分的だったわけですね。東京パラリンピックの開催に向け厚生省が動き出した昭和38年度になってやっと、障害者スポーツを県で推進すれば補助金が出ますよという制度ができました。

—— 当時の大分県は他の県に比べて取り組みが早かった？

県の厚生部長が国民体育大会の委員もやっていたようなスポーツ畑の人だったので、中村先生と協力しながら盛んに進めていました。

## 「バー募金」で 東京パラリンピック資金集め

—— 昭和38年のイギリスのストック・マンデビル大会にはその部長さんと中村さんがいらしたわけですね。

はい。部長と中村さんが役員で、「別府重度障害者センター」の入所者2人を連れて行きました。出場種目は卓球でした。当時は脊髄損傷という重度障害ですから、自分で行動するような時代ではなく、その連中がスポーツをやるというのは従来じゃ考えられませんでした。その点で、グットマン博士は大した男だったと思います。彼は医者で、車いすに乗った連中がスポーツをすることで人間として復活できるというのを実験的にやったわけです。ローマでオリンピックが行われた年に同地

で国際ストック・マンデビル大会を開催し、東京でもどうだという話になったわけです。日本側はオリンピック開催の2～3年前になってやっと重い腰をあげ、準備にとりかかった。

—— どのような体制だったのでしょうか？

開催年の1～2年前にパラリンピック準備委員会が発足しました。厚生省社会局の更生課に、もっぱらパラリンピックの業務をする分室ができたのは、開催年の昭和39年の4月です。準備委員会のトップが葛西嘉資<sup>よしすけ</sup>さんという、終戦時に厚生事務次官をやっていた人です。その下で事務局長をやったのが国立身体障害センター次長の氏家馨<sup>かおる</sup>さん。この2人は、後に「日本身体障害者スポーツ協会」が発足したときにそのまま会長と常務理事になりました。

—— 井手さんは大分から戻られたときに、その分室へ配属されたのですね。

大会まで半年ちょっとしかない時期でしたから、ほぼすべての準備ができていました。パラプレジア（脊椎損傷）・オリンピックを縮めてパラリンピック、と新聞記者のだけかが言い出したものが公称になって、私が来たときにはもうパラリンピックという名前でパンフレットまでできてるんです。ただグットマン博士は怒りましたけどね。「パラリンピックなんかじゃない、ストック・マンデビル・ゲーム！」とね（笑）

—— 井手さんが加わってからはどんな準備がありましたか？

記憶にありますのは、委員会として最後の追い込みで募金活動をしたことです。国庫補助で2000万円、東京都からも1000万円の補助がありました。その他どのくらいかかるかわかりませんので募金をするわけです。それでバーテンダー協会の協力でバーに募金箱を置いたりして募金に努めたところ、4800万円集まりました。

—— 募金だけでですか？

はい。坂本九さんなどが参加して一生懸命活動してくれたようです。「あゆみの箱」の前身みたいなことじゃなかったかと思います。それでようやく開催費の目鼻がついたわけです。代々木の進駐軍の宿舎、今の代々木公園に設置された選手村をオリ



1964年東京パラリンピック募金活動に使用された善意の箱

ピックから引き継いで、中二階みたいなどころにある食堂に長いスロープを延々とつけたのを覚えています。選手の宿舎についても、可能な限り車いす使用者に便利ように改善に努めました。

—— 選手はどうやって募集したんですか？

具体的には私は知らないんですが、脊椎損傷の選手たちでしたから、おもに別府、伊東の「重度障害者センター」と、箱根の風祭の国立療養所などから参加をお願いして、選手団を形成したというところだと思います。当時、脊椎損傷のような人たちはまずほとんど自宅では療養していなかったんです。

## 東京パラリンピック、 2部構成で開催

—— そして、いよいよ大会の開催ですね。織田フィールドで行われました。

大会は第1部、第2部とありまして、第1部はグットマン博士が言うところのストーク・マンデビル競技大会。脊椎損傷の選手しか出ない大会です。この第1部はイギリス側の運営で、グットマンがイギリスから職員を数人連れてきて行ったんですが、今日はもうくたびれたからおしまいだとか、お茶を飲むから休憩だとか、もういい加減なんです。

—— 日本とはやり方が違いますね。

しかも彼ら、スポーツなんてよく知らない連中をつれてきた。だから審判員は日本側から出したと思います。国立の聴力言語センターの職員に担当して

もらいました。日赤で募集した学生なんかを集めた語学奉仕団の人たちが、外国選手と日本人スタッフの間に入って通訳なんかをしてくれました。

—— 今でいうボランティアですね。

まったくのボランティアです。その連中が、試合が終わると外国の選手たちとともにタクシーに乗って渋谷へ飲みに行ったりしていました。

—— 第1部ストーク・マンデビル大会で、日本選手はメダルを獲りに行ったわけですか？

メダルはいくつか獲りました。アーチェリー、卓球なんかも獲りました。ただ、海外の選手が競技用車いすを乗り回していたのに対して、日本選手は日常用の車いすでやってるんです。当時いくら練習したとは思うんですけど、やっぱり多くの競技で歯が立ちませんでした。

—— 井手さんはその試合の様子を見ていらっしゃいましたか？

雑用に追われてほとんど見ていないんです。一番大変だったのは、新聞記者の質問に答えることでした。競技の内容を知らないのに。

—— 何がありましたか？

水泳のあるレースで日本の女性選手が一番にゴールをしたのですが、その種目は複数のレースのタイムによって順位を決めるもので、結果的にその女性は全体での1等ではなかった。でも記者たちはそのレースしか見てないもんですから、なんであの女性にメダルをやらないんだと怒るわけです。



パラリンピック・国際身体障害者スポーツ大会

1964年  
東京パラリンピックポスター



1964年 東京パラリンピック開会式英国選手団



1964年 東京パラリンピック第2部選手宣誓





1964年 東京パラリンピック  
第2部走り幅跳び



1964年 東京パラリンピック第2部陸上

私もよくわからないもんだから「知らない」と答えていました。

—— 当時は取材もたくさん来たんですか？

ここに泊まり込んでやってくださいと、記者クラブに宿舎を一棟準備しました。厚生省の記者クラブ26社が来ましたが、社会部が中心でした。

—— 運動部ではないんですね。

運動部はほとんど来なかったです。

—— 1964年東京パラリンピックの第2部の話をお聞かせください。

東京開催にあたって、葛西会長はパラプレジア（脊椎損傷）に限らず全ての障害者がスポーツをやるということを条件にしたんです。それで、第

1部は脊椎損傷者だけの国際大会として開催し、第2部では、当時日本に復帰していなかった沖縄県も含めて全国各都道府県から視覚障害者、聴覚障害者、肢体不自由の人を呼んで開催しました。西ドイツからも選手が参加しました。昭和38年から、障害者スポーツをやっている県には国から補助金が出たのも大きかったと思います。競技は日本側だけの運営でしたから、非常にスムーズにいきました。パラプレジアだけが障害者スポーツじゃないんだということを主催者としては見せたかったんだと思います。この競技会が、後から開催された「全国身体障害者スポーツ大会」のはじまりです。

## 皇太子殿下の熱意で 障害者スポーツの 全国大会が誕生

—— 大会の名誉総裁を、当時の皇太子殿下（今上天皇）がおつとめになりました。

皇太子殿下がそういったことをおつとめになったのは初めてだったので、どうやって総裁をやっていただいたんだとずいぶん他から聞かれました。準備委員会会長の葛西さんと当時東宮太夫だった鈴木菊男さんとが大学で同期だった縁などもあって、頼んだんだと思います。皇太子殿下



1964年 東京パラリンピック開会式

はとても熱心で、毎日競技をご覧になりました。毎年イギリスへ車いす選手を派遣するわけですが、その参加選手たちを毎年東宮御所に呼んでくださるんです。ですので私も毎年東宮御所に行きました。昭和39年には、ストーク・マンデビルに出場した卓球の選手が皇太子殿下のご子息（現、皇太子殿下）と卓球をしたのですが、車いすの選手に対していい加減なことをやったら悪いと思ったのか、皇太子殿下が浩宮殿下に、しっかり相手をしなさいと言われていました。そして東京大会が終わると委員を御所にお呼びになって、「このような大会を国内でも毎年行ってもらいたいと思います」と葛西さんにおっしゃり、そのお言葉が障害者スポーツ発展の後押しとなりました。そして昭和40年第1回全国身体障害者スポーツ大会が開催されました。

—— その昭和40年の第1回が岐阜大会ですね。39年11月にパラリンピックが終わって、国体が40年9月ですね。「3～4年前から準備している国体で、1年をきった段階でそんなことを言われてもとても無理だ」と断られたところを、なんとか進めました。あとは県の障害者団体の人達が、俺たちの大会ならやろうじゃないかと、動き出してくれたのが嬉しかったです。そのあと、大分、埼玉と。私はその3回に関係しました。運営は県の人たちで、私は皇太子さまの行啓に関する日程の調整とか、役所としてやらなきゃいかんことをやりました。

—— 厚生省社会局更生課に6年間いらして、障害者スポーツ大会の他どのようなことをされてきましたか？  
身体障害者福祉法の施行、予算の編成、施設の設置などがあるんです。各都道府県とやりとりして、身体障害者の施策全般について推進するのが役目でした。

—— そのあと、昭和45年から大臣官房広報室長になりました。45年から56年まで、障害者スポーツからは完全に離れまして、このころは公害問題が非常に大変で忙殺されておりました。

—— そのころの障害者スポーツに対する一般の理解というのはどうでしたか？



1964年 東京パラリンピック開会式での  
名誉総裁皇太子殿下・美智子妃殿下(当時)

全然ありませんでした。スポーツってのはもの好きな人のやることだっという認識でした。そんななか、大変ありがたいことに、昭和49年に大阪府が初めて障害者専用のスポーツセンターをつくったんです。長居の運動公園の隣です。市長さんが労働省の出身だったので、身体障害者の福祉の増進と雇用促進の気持ちがあったんでしょう。

## 日本身体障害者スポーツ協会 常務理事として 障害者スポーツを 一手に推進

—— 東京では昭和40年に、財団法人日本身体障害者スポーツ協会が設立されました。井手さんは昭和56年4月に、常務理事になられました。その前には協会でどんな取り組みがなされていたのでしょうか？

私は3代目の常務理事だったのですが、それ以前は常務理事ひとりしか専任者がいなくて、年に1回、全国大会に2日間顔を出して挨拶をする、ロンドンに選手を派遣するといったことしかやっていなかったんです。私の代からは事務局長がひとり来たもんですから、中の仕事はその人に任せて、私はもっぱら会長の指示を得て外へ出て仕事をしました。私がつとめた後半になって、だいたい今の障害者スポーツの基礎ができたんです。

—— 一方、厚生省の方では障害者スポーツを管轄する部署などはできていたんですか？



1981年 協会での初めての  
大会(滋賀)外国選手も参加  
右は葛西会長



担当は更生課です。厚生省は、パラリンピック時以外は協会に補助金を出しませんから。私がいいたときに、予算を1000万円出してくれたんですけど、1年で終わっちゃいました。厚生省のスポーツ面での業務は少なかったです。

—— 井手さんの常務理事としての最初の仕事は？

西ドイツのケルンで開催された聴覚障害者の世界大会に視察に行きました。その聴覚障害者の大会開催を日本が予定して、各国を招待していたという事情があったからです。



1985年 ストーク・マンデビル大会



1986年 第4回フェスピックインドネシア大会



1992年 バルセロナパラリンピック

—— このころから国際的な大会を日本でもやるし、日本も積極的に視察に行くというのが始まっていたんですね。

そうですね。またこの年には滋賀県で全国大会をやりました。県の卓球協会の会長さんが責任者で、運営側にスポーツの専門家が揃っていました。しかし協会の私どもはスポーツのその字も知らないで、相談にこられても的確な返事ができないんです。で、「スポーツ協会なっとらん」と県から言われ、これではいけないと思ってそれから必死で勉強しました。ちょうど昭和54年に「国立身体障害センター」「国立東京視力障害センター」「国立聴力言語障害センター」が統合されて、所沢に「国立身体障害者リハビリテーションセンター」ができたんです。ここにお願いをして、さまざまなことを推進しました。

—— 76年モントリオール、80年モスクワオリンピックのころのパラリンピックはどうでしたか？

グットマン博士の力でもってまずローマでやった、東京もやった、だけどそれ以降の開催都市は相手にしてくれない、という状態でした。

—— 84年ロサンゼルスオリンピックのとき、パラリンピックはアメリカのニューヨーク州とイギリスでやっています。これはロサンゼルスに相手にされなかったからですね。

私はニューヨークに参りました。ホフストラ大学の施設を使って、脊椎損傷者以外の競技が開催されたのです。車いす競技、グットマン博士のストーク・マンデビル競技は結局イギリスの自分の所で開催せざるを得なかった。

—— そのときの日本選手の競技力というのはどうでしたか？

可もなし不可もなし(笑) 選手が



1998年 長野パラリンピック選手村開村式(中央)

やっぱりいないのです。トップの選手は何人かしかいないですし、若い連中が不足していて、特に冬の大会なんか全然だめなんです。

—— そのころ、選手の招集には関わっておられないですか？

選手も役員もお金を出せないで、県に派遣をお願いするわけです。出身地から東京までの旅費は出身地負担、東京から海外までの渡航経費は協会負担、海外での経費は自転車振興会（現、JKA）の補助金で運営、というシステムでした。そのあと、大阪に続いて東京にも、国立市と北区に障害者スポーツセンターができて、協会に運営を委託してくれたんです。私のほうで協会の職員を募集しました。国立市、北区それぞれ20名程度でした。これで協会の職員が増え、ずいぶんと楽になりました。

## 組織、施設、制度づくり 障害者スポーツの基礎を構築

—— 障害者スポーツセンターの主たる狙いというの？

障害のある人たちにスポーツを通じて外に出る機会を与えるということです。車いすバスケットボールなどは自主的に各県で組織ができていて既に活動も盛んでしたが、私どもは水泳や陸上などでそういった組織作りを一生懸命やりました。県に

対してもスポーツ協会をつくりましょう、スポーツセンターをつくりましょうと。表彰制度もつくりましたし、指導員制度も多摩のスポーツセンターのスタッフが細かく立てた研修計画を私が承認しまして、会長の決裁を得て実施しました。それが全部、今の障害者スポーツの基礎になっています。当初は指導員をつくっても働く場所がないのが悩みどころでしたが、最近では障害者のスポーツセンターも全国にできて、働きどころが増えたようです。

—— 現在では、多くの都道府県に障害者スポーツセンターができてきています。その土台をつくられた井手さんの熱意の原動力は何だったのでしょうか？

とにかく、選手がいないわけです（笑） そもそも、障害のある人がスポーツをやろうとしたって、普通のスポーツセンターでは邪魔だといって受け付けてくれないんです。それなら専用施設をつくらうってことになって。大阪の障害者のスポーツセンターをみなさんが喜んで利用しているので東京もやろうってことになりました。本当は、一般のスポーツをやる場所を障害者に開放してくださるとよいのですが。

—— 障害者の声を聞いたりもされたんでしょう。ええ。いろんな工夫をしながら、裾野を広げて行きました。

—— 外国に行って外国のシステムを勉強されたりはしましたか？

いや、そういうことはしなかったです。パラリンピック東京大会を開催したおかげで、日本は進んでいたと思います。特に韓国はたびたび、日本の現状を視察しに来ました。

—— それが88年のソウル大会の運営の参考になった？

そうです。韓国では同じ障害者でも、生活保護を受けている障害者とそうじゃない障害者でまったく扱いが違って、生活保護受給者は優先的に、そうでない者にはあまり干渉しないのです。

—— お国柄があるんですね。井手さんはパラリンピックの各大会時、現地に行っておられたね。



1998年  
長野パラリンピック選手村副村長





はい。私が行く前はお医者さんが選手団の団長をやっていたんですが、団長はもし事故があったときは責任を負わなければならない。お医者さんにそんなことまで負わせちゃいけないというので、私が団長をやったんです。実際、危ないこともありました。イギリスに行ったときに、ひとり褥瘡<sup>じよくそう</sup>が化膿した選手がいて、ロンドンから帰る飛行機で危険な状態になったんです。急遽途中で点滴液を積み込んで飛行機の中で手術です。助かりましたからよかったですけど、そうでなければ私は責任を負うところでした。

—— その他、ご苦労はありましたか？

こっちも一生懸命やってるんですがなかなか追いつかないことも多いです。ひとつは、最近企業が障害者を雇うようになり、労働力のある障害者は就職する。嬉しいことですけど、大企業にでも行っていれば無理も利くんでしょうけど、中小企業ではやっぱりなかなかスポーツの時間はとれないでしょう。大会に出場すると20日間は休むことになりますし、ましてや練習なんてとんでもない、という話です。

—— なるほど。

もうひとつは、重度の障害のある人たちをどうするか。大変大きな問題なんです。まったく寝たきりに近いような、重度の脳性麻痺の人たちに、スポーツを通じて生活の喜びというのを味わってもらえ

ないだろうか、というのがスポーツに期待していることなんです。ただ、これが大変難しい。たとえば、台の上にボールをのせるだけで競技ができるようなボウリングなどは福岡市で開発されました。目の見えない人のボウリングなどもあります。今はいろいろと工夫された障害者スポーツの新しい種目も増えていると聞いております。

## 障害者スポーツの現状に思うこと

—— 2014年4月から障害者スポーツが文部省に移管されましたね。

実は昭和39年、パラリンピック東京大会が終わったときに、「鉄道身体障害者福祉協会」が文部省の体育局長、厚生省の社会局長を招いて座談会を催したんです。そこで、パラリンピックで行われたのはスポーツです、文部省さん、これからおやりになりませんかという話もありました。私も日本体育協会に行って、身体障害者スポーツ協会についていろいろと説明しました。その流れで、日本体育協会の会長が事務局長帯同で車いすバスケットボールの全国大会や「全国身体障害者スポーツ大会」に参加してくれたのは嬉しかったです。学校の先生もずいぶん助けてくれました。特に特殊学級の先生は極めて関心が高く、ずいぶん付き合いがありました。日本体育協会や学



2015年5月 協会創立50周年での挨拶



2015年5月 協会創立50周年新ロゴ発表(後列右端)

校、さらにはIOCとの連携もできてきて、今の流れにつながったと思います。

—— スポーツ基本法もできました。今、足りないことは何だと思われますか？

スポーツの専門家からみた、障害者スポーツのあるべき姿というのを基本的に考えていただかなきゃいかんと思います。特に、重度障害者に対するスポーツの適用がいかにあるべきかということは、重要なテーマのひとつになると思います。やはり人間の尊厳を認められるにはスポーツが一番早いんじゃないかと思ったり、苦しいこともあるかもしれませんが、楽しみながら自分の人生を切り開いていくという意味では、非常にスポーツというのは意義があるんじゃないかと思ったり。長野の車いすバスケットボールは、監督が厳しく指導し、選手が音を上げるまでやるんです。厳しいトレーニングですけど、それで一人前になっていくわけですから本人にとってはいいことなんです。実際長野県はその監督になってからずっと全国大会で優勝をとげていました。

—— なるほど。

最初に車いすの障害者を雇用した神奈川の会社から言われたことがあります。井手さん、職業訓練なんかしないでいい、朝おはよう、終わりにはさようならと、挨拶が出来る人間を育ててください。人間として基礎的なことを育ててくれなければだめですと、そういうことです。スポーツがきっかけで、そうした社会性を養うこともできるんです。

—— スポーツに限らず、障害者の環境改善のために井手さんは力を尽くしてこられました。振り返っていかがですか？

東京パラリンピックが終わったときに、世間からこっぴどく叩かれました。「身体障害者福祉法」施行から20年近く経って、なんにもやっていないと同じではないかと。外国の選手はスポーツが終わったらタクシーに乗って遊びに出る。翻<sup>ひるがえ</sup>って日本の選手はくたびれてベッドで寝てる。病人にスポーツをやらしたんだからそりゃそうです。ということは、病人のリハビリテーションや社会復帰ということをまったく考えないで「身体障害者福祉法」をつくったんだろうと。それを受けて、当時考えられたことをすべて案にして出して、身体障害者福

祉制度の改革をめざしたわけです。昭和45年にできた「心身障害者対策基本法」の前駆にはなったかなと思ってます。役人生活として素晴らしいことをやったんだなという気持ちはあります。やっぱり達成感はありません。

## 2020年東京パラリンピックに向けて思うこと

—— 1964年の東京大会から時を経て、2020年東京大会が近づいてきます。

1964年のパラリンピックは障害者に対して大変大きなショックを与えました、いい意味でね。昭和30年代までは、重度の障害者が社会から隠されるといった時代でもありましたが、大会をきっかけに福祉制度の充実もできましたし、障害者自身も自分の意見を言うようになりました。そういう意味でははっきり言って、いい世の中になりました。

—— きたる東京パラリンピックを、井手さんもまだまだ若々しい九十代で迎えられる。どのような期待をもっていらっしゃいますか？

若い人達がどのくらい出てくるかだと思います。障害のある人も、ちょっと練習すれば自分たちもパラリンピックに出られるんだとってくれるとありがたいです。スポーツに参加することによって、自分の人生が切り開けるということを実感してもらいたいと思います。一般の人たちと違って、障害を持つ人がスポーツをやるというのは大きな転換期になるわけです。重度であるからといってひっこむのではなくて、ぜひとも積極的に参加してもらいたいです。また、最後に当時、身体障害者スポーツにご援助いただいた自転車振興会、日本船舶振興会（現、日本財団）はじめ多くの団体などに改めて厚くお礼申し上げます。

—— ありがとうございます。





井手精一郎氏 略歴

世相

**1924** 井手精一郎氏、東京都に生まれる

**1945** 第二次世界大戦が終戦  
**1947** 日本国憲法が施行

**1949** 井手精一郎氏、厚生省  
(現、厚生労働省)に入職し、  
障害者スポーツ関連業務に携わる

**1950** 朝鮮戦争が勃発  
**1951** 安全保障条約を締結  
**1955** 日本の高度経済成長の開始

1964 東京パラリンピック開催  
昭和39 財団法人日本肢体不自由者リハビリテーション協会(現、公益財団法人日本障害者リハビリテーション協会)設立

**1964** 井手精一郎氏、  
東京パラリンピックに携わる

**1964** 東海道新幹線が開業

1965 財団法人日本身体障害者スポーツ協会(現、公益  
昭和40 財団法人日本障がい者スポーツ協会)設立  
第1回全国身体障害者スポーツ大会、  
岐阜県にて開催される  
これが全国的な競技会の始まりとなる

**1965** 井手精一郎氏、第1回全国身体障害者  
スポーツ大会に携わる

1968 テルアビブパラリンピック開催  
昭和43 **1968** 井手精一郎氏、テルアビブパラリンピック  
にて日本選手団の庶務を務める

**1969** アポロ11号が人類初の月面有人着陸

1970 財団法人日本肢体不自由者リハビリテーション  
昭和45 協会、財団法人日本障害者リハビリテーション協  
会に改称

**1973** オイルショックが始まる  
**1976** ロッキード事件が表面化  
**1978** 日中平和友好条約を調印

1981 財団法人日本障害者リハビリテーション協会、  
昭和56 障害者リハビリテーション振興基金を創設

**1981** 井手精一郎氏、  
財団法人日本身体障害者スポーツ協会、  
財団法人日本障害者リハビリテーション  
協会の常務理事に就任

**1982** 東北、上越新幹線が開業

1984 ニューヨーク・  
昭和59 アイレスベリーパラリンピック開催  
財団法人日本障害者リハビリテーション協会、  
障害者リハビリテーション指導者養成研修を開始

**1984** 井手精一郎氏、  
ニューヨークパラリンピックにて  
日本選手団長を務める

1987 財団法人日本障害者リハビリテーション協会、  
昭和62 総合リハビリテーション研究大会を開催

1988 ソウルパラリンピック開催  
昭和63 **1988** 井手精一郎氏、ソウルパラリンピックにて  
日本選手団長を務める

1992 バルセロナパラリンピック開催  
平成4 **1992** 井手精一郎氏、バルセロナパラリンピック  
にて日本選手団長を務める

**1995** 阪神・淡路大震災が発生  
**1997** 香港が中国に返還される

1998 長野パラリンピック開催  
平成10 **1998** 井手精一郎氏、長野パラリンピックにて  
選手村副村長を務める  
井手精一郎氏、  
財団法人日本障害者リハビリテーション協会  
の非常勤理事に就任

1999 財団法人日本身体障害者スポーツ協会、  
平成11 財団法人日本障害者スポーツ協会に改称

**2003** 井手精一郎氏、  
財団法人日本障害者リハビリテーション協会  
の非常勤理事を退任

2007 総合リハビリテーション研究大会、30周年を迎える  
平成19

**2008** リーマンショックが起こる  
**2011** 東日本大震災が発生

2014 公益財団法人日本障害者スポーツ協会、  
平成26 公益財団法人日本障がい者スポーツ協会に改称  
スポーツ振興の観点から行う障害者スポーツに  
関する事業を厚生労働省から文部科学省に移管

2015 公益財団法人日本障がい者スポーツ協会、  
平成27 創立50周年記念式典を開催

オリンピック・パラリンピック年表

オリンピック		パラリンピック	
1896	第1回 アテネ[ギリシャ]		
1900	第2回 パリ[フランス]		
1904	第3回 セントルイス[アメリカ]		
1908	第4回 ロンドン[イギリス]		
1912	第5回 スtockホルム[スウェーデン]		
1916	第6回 ベルリン[ドイツ]*中止		
1920	第7回 アントワープ[ベルギー]		
1924	第8回 パリ[フランス] / 第1回 シャモニー・モンブラン[フランス]		
1928	第9回 アムステルダム[オランダ] / 第2回 サン・モリッツ[スイス]		
1932	第10回 ロサンゼルス[アメリカ] / 第3回 レークプラシッド[アメリカ]		
1936	第11回 ベルリン[ドイツ] / 第4回 ガルミッシュ・パルテンキルヘン[ドイツ]		
1940	第12回 東京[日本]*返上 → ヘルシンキ[フィンランド]*中止		
1944	第13回 ロンドン[イギリス]*中止		
1948	第14回 ロンドン[イギリス] / 第5回 サン・モリッツ[スイス]		
1952	第15回 ヘルシンキ[フィンランド] / 第6回 オスロ[ノルウェー]		
1956	第16回 メルボルン[オーストラリア] / スtockホルム[スウェーデン] 第7回 コルチナ・ダンベッツォ[イタリア]		
1960	第17回 ローマ[イタリア]	第1回 ローマ[イタリア]	
1964	第18回 東京[日本]	第2回 東京[日本]	
1968	第19回 メキシコシティ[メキシコ] 第10回 グルノーブル[フランス]	第3回 テルアビブ[イスラエル]	
1972	第20回 ミュンヘン[西ドイツ] 第11回 札幌[日本]	第4回 ハイデルベルグ[西ドイツ]	
1976	第21回 モントリオール[カナダ] 第12回 インスブルック[オーストリア]	第5回 トロント[カナダ] 第1回 エンシェルスヴィーク[スウェーデン]	
1980	第22回 モスクワ[ソ連] 第13回 レークプラシッド[アメリカ]	第6回 アーネム(アルヘルム)[オランダ] 第2回 ヤイロ[ノルウェー]	
1984	第23回 ロサンゼルス[アメリカ] 第14回 サラエボ[ユーゴスラビア]	第7回 ニューヨーク[アメリカ] アイルスベリー[イギリス] 第3回 インスブルック[オーストリア]	
1988	第24回 ソウル[韓国] 第15回 カルガリー[カナダ]	第8回 ソウル[韓国] 第4回 インスブルック[オーストリア]	
1992	第25回 バルセロナ[スペイン] 第16回 アルベールビル[フランス]	第9回 バルセロナ[スペイン] 第5回 ティエヌ/アルベールビル[フランス]	
1994	第17回 リレハンメル[ノルウェー]	第6回 リレハンメル[ノルウェー]	
1996	第26回 アトランタ[アメリカ]	第10回 アトランタ[アメリカ]	
1998	第18回 長野[日本]	第7回 長野[日本]	
2000	第27回 シドニー[オーストラリア]	第11回 シドニー[オーストラリア]	
2002	第19回 ソルトレークシティ[アメリカ]	第8回 ソルトレークシティ[アメリカ]	
2004	第28回 アテネ[ギリシャ]	第12回 アテネ[ギリシャ]	
2006	第20回 トリン[イタリア]	第9回 トリン[イタリア]	
2008	第29回 北京[中国]	第13回 北京[中国]	
2010	第21回 バンクーバー[カナダ]	第10回 バンクーバー[カナダ]	
2012	第30回 ロンドン[イギリス]	第14回 ロンドン[イギリス]	
2014	第22回 ソチ[ロシア]	第11回 ソチ[ロシア]	
2016	第31回 リオデジャネイロ[ブラジル]	第15回 リオデジャネイロ[ブラジル]	
2018	第23回 平昌[韓国]	第12回 平昌[韓国]	
2020	第32回 東京[日本]	第16回 東京[日本]	

■ 夏季大会  
■ 冬季大会  
■ 井手精一郎氏参加大会

- パラリンピック・障害者スポーツに関する主なできごと
- 1888 ドイツで聴覚障害者のためのスポーツクラブが創設
  - 1910 ドイツ聴覚障害者スポーツ協会が創設
  - 1924 国際ろう者スポーツ連盟CISSが設立  
第1回国際ろう者スポーツ競技大会開催
  - 1948 ストック・マンデビル病院内で車いす患者によるアーチェリー大会を開催。これがパラリンピックの原点となる
  - 1952 第1回国際ストック・マンデビル大会開催
  - 1960 国際ストック・マンデビル大会委員会ISMGC設立  
第1回パラリンピックと位置づけられる国際ストック・マンデビル大会開催
  - 1976 国際身体障害者スポーツ大会が、初めて国際ストック・マンデビル競技連盟ISMGFと国際身体障がい者スポーツ機構ISODの共催で行われる
  - 1980 視覚障害者の国際的なスポーツ団体である国際視覚障害者スポーツ協会IBSAが設立
  - 1985 国際オリンピック委員会IOCは国際調整委員会ICCがオリンピック年に開催する、国際身体障害者スポーツ大会を「Paralympicsパラリンピックス」と名乗ることに同意する
  - 1986 国際聴覚障害者スポーツ協会と、国際精神薄弱者スポーツ協会がICCに加盟
  - 1989 国際パラリンピック委員会創設
  - 1999 日本パラリンピック委員会創設





1946年 歩兵第514連隊、解散の日(後ろから2列目左端)



1949年 厚生省 社会局 保険課一同(伊豆)(後列右から7人目)



中村裕博士



1964年 東京パラリンピック第2部陸上



1964年 東京パラリンピック第2部走り幅跳び



パラリンピック-国際身体障害者スポーツ大会  
1964年  
東京パラリンピックポスター



1964年東京パラリンピック  
募金活動に使用された善意の箱



1964年 東京パラリンピック第2部選手宣誓



1964年 東京パラリンピック開会式での名誉総裁皇太子殿下・美智子妃殿下(当時)



1964年 東京パラリンピック開会式英国選手団



1964年 東京パラリンピック開会式





1981年 協会での初めての大会(滋賀)外国選手も参加。右は葛西会長



1985年 ストーク・マンデビル大会



1986年 第4回フェスピックインドネシア大会



1992年 バルセロナパラリンピック



1988年 ソウルパラリンピック(役員左端)



1998年 長野パラリンピック選手村副村長



1998年 長野パラリンピック選手村開村式(右から2人目)



2015年5月 協会創立50周年での挨拶



2015年5月 協会創立50周年新ロゴ発表(後列右端)



井手精一郎